

ハンディ④ 人見知り弁護士

西村國彦さん

ゴルフの 旅人

クラブを持てば世界は友だち

第2回

special

Nishimura Kunihiko

昭和22年生まれ。東京大学卒。弁護士。プレーヤーの立場からゴルフ場再生に取り組んでいる。昨年ニュー・セントアンドリュースGCジャパンのクラチャンになった。HC4。

日本一敷居の高い超名門倶楽部へ

廣野を 回れて 幸せ!

廣野といえば日本一敷居の高いコース、プレーどころか中に入るのもはばかられるゴルフ場で日本オープン開催、さらにプレーもできるなんてすごい幸せ。ゴルフアーマリに尽きる。勝者、片山晋呉のプレーを

つぶさに観戦。廣野のコースと歴史を隅々まで

とことん涉猟し、翌月曜、プロと同じティから回って

「ゴルフの旅人」が見て感じた体験記。

ぼくらにとつての未知の「廣野」に迫った。

撮影・岡沢裕行

廣野は隅から隅まで セレブなゴルフ場だった

10月のある日、突然編集部から電話。38年ぶりに、あの超名門コース廣野ゴルフ倶楽部で開催される日本オープン。この目で見られる。しかも翌月曜には、選手たちと同じ設定で、プレーできるというのだ。「ゴルフの旅人」としてはこのチャンスは逃せない。

なにせ敷居の高いことでは名高いあの廣野だ。世界の青木功が今年の春、まだ廣野をプレーしたことがないと告白したくらいだ。まして一般人にとつては、まるで奥の院。

廣野ゴルフ倶楽部は、英国人チャールズ・H・アリソンが設計し、1932年（昭和7年）開場したコースであり、今でも伝統あるクラブライフを営むゴルフ場なのだ。英国のゴルフ場を見てきた神戸の財界人達が神戸の奥地に見つけた土地に、ハリー・S・クルトの弟子アリソンが、3日間ホテルにこもって、戦略性豊かなコースを図面に描いた。

例えば、9番と18番だ。最終日早朝6時にコースに入って、この二つのホールでカップ切りを見た。時々映像で目に触れる、朝もやと斜めに差し込む朝日の中での芝刈りとカップ切りに憧れがあった。また、まだ誰もいないスタンドの土段から眺めると両ホールともグリーン手前の花道が大きくへこんでいるのがわかる。中嶋が大喜びしたり、みんなボギーをやたら打っていたけど、こんな仕掛けがあったのか。そんな日本オープン仕様の廣野で回れるなんて夢のようだ。

とにかく廣野は、珍しいことばかりだ。まず、ゴルフ場入口の真ん前に駅

がある。神戸電鉄の広野ゴルフ場前駅下車徒歩1分なのだ。ゲートを入るとそこは大学の構内のような。フロントは大学の事務室みたいだ。

コースに出ても他のゴルフ場とは違う。7番パー3のティ横にある小屋の屋根裏には、「マシオートホール」でワン・オンしてもみだりに手を叩かないで下さい」と大書きしてある。

食事をするところはレストランとは呼ばず、ダイニングという。食事の伝票は、自分で書く。ゴルフのスコアと同じく、自己申告なのだ。

確かに、パー3でグリーンオンする。ほかのゴルフ場では、手をたいたり、ナイスオンと叫んだりする。俣にはこれに対して帽子を取って挨拶するのがマナーだという人がいたりする。しかし、ただオンしただけの、ふううのショットに過剰反応しないのが、廣野独自のゴルフマナーなのだ。時代を超えてゴルフマナー重視の姿勢をとり続けているのは、凄いことだと思っただ。廣野は隅から隅までセレブなゴルフ場だった。

あの廣野で38年ぶりに 日本オープン開催！



第70回日本オープン。最終組から4組前を回っていた片山晋呉が、伊沢、バリーなど失速していく上位陣の間を縫って快調にスコアを伸ばして優勝。ただ1人アンダーパーでの勝利が廣野の難しさを象徴していた。



廣野を 回れて 幸せ!

日本オープン
15番ホール



10番は短いパー4だが、フェアウェイ右に巨大なバンカー群。グリーン周りもバンカー群でガードされている

フェアウェイまで 250ヤードも 打つなんて……

日本オープン仕様の廣野は
とてつもなく難しかった

月曜の朝、いよいよ日本オープン仕様の廣野のスターティングホールに立った。しかも昨日のティから挑戦しようというのだ。キャディさんは無謀な3人組のお手並み拝見という雰囲気だ。天気は快晴、風はない。3人ともトーナメントをやるようなゴルフ場には慣れているはずなのだが、なにかいつもと全く違う感じだ。武者震いを覚えた。それぞれ昨日まで廣野に向けてきた思いを込め、第1打を放つ。

確かに距離は長くなっている。普段はパー5の1番もパー4になったほか、伸ばしたホールは約20ヤードずつ伸びている。これはドライバーの平均飛距離が230から240ヤードの我々には、決定的なダメージを与える。なにしろ1番から4番まですべて450ヤードを超えるパー4で、セカンドが届かないのだ。その意味では、一般ゴルフアーには廣野はモンスターになった。でも今の日本オープン出場選手にとって、決定的なのは、距離ではありえない。やはりこのコースは、グリーンをはずした時、かなりの確率でトラブル発生を予感させるのであろう。

特に廣野では、砲台グリーン手前の花道に大きな窪地が多い。3、4、9、15、18番の各ホールグリーン手前に窪

地があった。15番だけは、花道が途切れている。廣野特有の窪地が、廣野を難しくしているひとつの秘密ではないだろうか。

廣野の古くからのメンバーたちは、この窪地からパターで転がし上げてピンに寄せるのがうまいという。この夏スコットランドでプレーした私は、窪地からパターで転がし上げることに迷いはなかった。かつて廣野のメンバーで日本アマ優勝6回の中部銀次郎さんは生前、この窪地の土手にライナーでぶつけて転がし上げるのを得意としていた。中部さんは、18番の窪地からの寄せも絶品であつたらしい。

しかし、ピンハイまで打つてくるトップランクの選手にとっては、窪地より風の方が、ハザードとしては見えないう上に絶えず変化する分、効いてくるのであろう。

13番のティとグリーンへの風向きをNHKがチェックしていたが、オナーの選手はほとんど風を読み誤っていた。最終日は、グリーンオーバーする選手、右に大きくはずす選手が続出した。ショットが曲がらなかったのは片山ですら、風を読み切れず、右バンカーからのパーセーブであった。伊沢もフェアウェイから打てばやさしいはずの16番パー4で、右の17番の池方向からの風を読めずにグリーンをはずし、万事休した。

私はといえば、スタートから、誤球は起きるは、クラブ取り間違い事件は起きるは、いつもと違うことばかり。アウトでは長いパー4とグリーン手前の窪地に手こずり、なかなかコースと対話ができない。9番パー5ではそのグリーン手前と左の窪地が気になり、ダボ、バックナインも気の抜けるホールは

廣野は林間なのに リンクスの 風情があった

広野を
回れて
幸せ!



(この状況はバターの転がし上げが
いちばんなんだよ)
4番グリーン手前は窪地。ザックリは禁物だ。英国で
仕入れたノウハウを早速使ったら、結果はまあまあ



(この落差が廣野の怖さなんだね)
7番パー3のグリーン右手前は大きく下がっている。
選手は皆左手前を狙っていたが、右下に落とすと大変

廣野は根っこで英米の コースとつながっていた

廣野を、オーガスタナショナルや全米オープン開催コースと同じく、「最高の舞台」として畏敬の念をもって歩いた片山晋呉は、己を知った上で必勝作戦を立てていったようだ。

コースの長さや日本オープンの設定と自らの体や飛距離を照らし合わせて、パオンしないホールがいくつもあることを想定し、彼は、3メートルのパーパットの練習を徹底的にやっていたという。

そしてドライバーではフェードしか打たない、という勇気ある決断。これは、05年の全米プロでミケルソンが、飛距離を捨てフェード打ちに専念し、優勝という良い結果を出したことに符合する。最終日フェアウェイキープ率は、片山が11/14でトップ。伊沢は4/14で最下位に近かった。

片山がこたわるドリルの成果は、最も緊張する場面で発揮されるのである。その意味では、川岸良兼などまだまだ修行が足りないのだろうか。最終18番で、フェアウェイのど真中から引つ

かけ気味に飛びすぎるボールを打ってしまったのだから。

片山がいいことを言った。自分たちが日本オープンにコースを開放してくれたことに感謝する、と。

廣野は、誕生の時から、一般人には狭き門であったが、その一方で、英米を中心とする世界とはつながっていた。海こそないが、起伏ある高台の林間に位置し周辺に池があるため、複雑な風の影響を受けるリンクスだったのだ。

そして昭和の不況にもめげず、世界とのつながりを持っていた創立メンバーたちは、英国のリンクスランドのみならず、ペブルビーチやパインバレーを意識しながら、廣野を育てていったのだ。

そして今、晋呉は世界のメジャーをひと巡り経験したうえで、世界への玄関とも言うべき廣野で頂点に立った。

これからは、全英出場を突如キャンセルするようなわがままは許されない。

男子プロトーナメントの復活も、海外メジャー挑戦という高いレベルでの血のにじむような努力と、プロのトーナメントはファンあつてのものという

謙虚な姿勢がかみ合ってこそ、実現できるのではないだろうか。

私の方は、自分の未熟を思い知らされ、廣野に脱帽してコースに別れを告げた。久しぶりの90はとても痛い。このコースは、苦勞してパーをとることの喜びを思い出させてくれた。まして5番パー3では、小躍りしたくなるようなバーディまでくれた。そして231ヤードパー3の17番では、少し風を読み間違えると、それまでの貯金が全部借金に変わってしまうゴルフの恐ろしさを教えてくれた。

そんな廣野で私達についてくれたキヤデイさん。池越えの13番パー3で、3人全員がワンオンすると、なんと珍しいことにグリーン上で旗持ちをやってくれたのだ。廣野のキヤデイさんはグリーン保護のためグリーンに乗らないのが原則と聞いていたので、これは、3人のいいショットにご褒美をくれたのだろう。

スコアの割にさわやかな気持ちになった帰り道、いろいろ考えた。やっぱりゴルフっていい。いろいろな人に会えるし、いろいろなコースを回れる。

特に廣野では、日本にいながら、ちょっとぴりスコットランドの雰囲気も味わえたし、独特のゴルフマナーに接することだってできた。いま日本のゴルフ場には大きな変化が起きているのではないだろうか。上場するゴルフ場も出てきたし、他業種から参入して、ゲーム感覚の若者を受けるゴルフ場もある。

でも廣野みたいに本場のセレブのゴルフ場があってもいいじゃないか。そんなゴルフ場で回れた私たちのように、みんなにも回れるチャンスができるといいと思った。



壁みたい
に立ち
はだか
るフェア
ウェイ
これじゃ
まるで
打ち上
げじゃ
ないの

自分で伝票を書くなんて、これが廣野の流儀なのか



上：ダイニングはレトロな落ち着いた雰囲気。片山はプレザーを着て食事した。でも選手の奥さんはいれなかった。右：名物のカレー。ごはんもカレーもストップをかけるまで盛ってくれる。味もいい



ひとつもない。その中で最高のプレッシャーを感じたのは、なんと言っても14番のパー4。距離はないのだが、ティに立つと、フェアウェイが大きく左に傾きながら前方にそびえ立っている。飛ぶ選手は右の高いところを狙い、セカンドは9番とかピッチングらしい。でも非力な私は、芯を食わずにフェアウェイセンターのつもりが、どんどんボールが左下に落ちてきて、左手前のセミラフからの打ち上げショットになってしまった。こんなホールあんまり名門コースで見たことないけど、これが廣野なのだろう。あのオーガスタだつてすごい打ち上げホールはあるのだから。これで風でも吹いたらもうお手上げだ。



13番の
パットは攻略したものの
ホースター・廣野に
打ちのめされた